

大

学

2025

7

時

No.

423

報



｜特集｜

大学運営への学生の参加

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748 2025(令和7)年07月20日発行【隔月刊】

明治大学



岸本辰雄胸像(1980年代)



岸本辰雄胸像(現在)



「駿台新報」184号(1928年3月10日)記事(抜粋)



岸本辰雄(1851-1912)

創立者・岸本辰雄の胸像

明治大学の創立者は岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操の3名である。現在、3名の胸像は、駿河台キャンパスの陽だまり広場を囲むように立っている。

岸本の胸像は、1928年に竣工した「記念館」内に設置された。制作にあたったのは彫刻家の北村西望である。戦時中の金属供出により仮像となったものの、1965年に復元された。1998年、駿河台キャンパスの新たな教育拠点としてリバイタワ―が竣工し、その第2期工事で陽だまり広場が整備されると、同地に移設された。その際、創立者の宮城と矢代の胸像が新造され、現在の配置となった。

岸本は1851年に鳥取藩士の子として誕生した。藩校での修学を終えた岸本は、1868年4月、戊辰戦争のさなか、藩から京都警衛部隊への従軍を命じられた。これを10月まで務めた後、新設された藩軍・新国隊に所属。同部隊の一員として1869年9月に上京した。以後、東京で「仏学修行」に励んだ岸本は、1871年1月に鳥取藩の貢進生に選ばれ

大学南校に入学。しばらくして司法省に新設された法学校に移り、ボワソナードらからフランス法学を学んだ。成績優秀であった岸本は、1876年国費でパリ大学に留学し、1879年に法学士号を取得した。1880年の帰国後は司法省の官僚として法典編纂などに従事する傍ら、1881年1月に明治大学の前身である明治法律学校を開校。法学普及に生涯を捧げた。法学部から開学した明治大学は、現在10学部を擁する総合大学となっている。

90	82	74	72	70	60	52	50	44	38	32	30	14	10
だいがくのたから 明治大学 大学点描 法政大学 巻頭言 多様性、公平性、包摂性のある大学を目指して ダイアナ・コー 視点 地域とともに歩む地方小規模大学 ―敬和学園大学の「実践するリベラルアーツ」教育― 金山愛子 座談会 ワタシたち大学職員チュウト採用組！ 〈覆面座談会〉日本私立大学連盟加盟大学職員4名／（司会）音好宏 特集 大学運営への学生の参加 学生職員制度―学・教・職で目指す「100人の一歩」― 藤野圭 KONAN Ambassadors―広報活動を行う学生団体― 高橋武 楽しんじゃおう！多摩XinChao！ 佐野竜平 学生ファンドレイジングサポーター―東京大学の取り組みとその意義― 齋藤智 学生の声を生かした学生参画型の質保証 「カリキュラム・コンサルティング」 山咲博昭 日本の大学における学生参画の現状と今後の可能性 ―大学基準協会の学生参画に関する取組の紹介― 田中正弘 ずいそう 将来に向かう学校経営を目指して 廣田りょう 小特集 これからのキャンパスの在り方とは―24時間利用可能な施設の事例から考える― 構想400 キャンパスブランド構想 ―価値創造と社会変革を牽引する自然科学系キャンパス整備― 河村由紀彦 24時間キャンパスと呼ばれたSFC 中峯秀之 365日24時間オープンの自習室 志鷹英男													

古代より中国で使用され、アラビア商人を経由して西方に広まり、中世ヨーロッパの航海に革命をもたらした羅針盤。表紙デザインには、社会の変化が著しい現代において、大学の“今”を映し出し、向かうべき未来をはかる指針とならん、という思いを込めています。



142	138	128	126 124 122	116	112	106	98	92
執筆者・出席者のご紹介（掲載順）	新会員代表者紹介	クローズアップ・インタビュー	加盟校の幸福度ランキングアップ《時計台・時計塔編》	明日への試み	私の授業実践く教育現場の最前線からく	寄稿「私立大学のミライー研究編」	寄稿	ZEN Studyによる学修革新—ZEN大学の取り組みより—
144 私大連ニュース	文教大学／福岡女学院大学／上智大学／皇學館大学／京都橘大学／武蔵野大学／龍谷大学	株式会社みずほ銀行 エグゼクティブアドバイザー（2025年3月現在） 大櫃直人さんに聞く（聞き手）外川智恵	後世に繋げたい本学の象徴 安部紀芳 時を刻む学びのシンボル—大阪学院大学が刻む実践的な人材の育成— 学生たちの願いが生んだ時を刻む塔 —愛知大学に響く「自由・受難の鐘」とその由来— 藤田佳久	自分らしく輝くことが、誰かの力になる 小檜山ルイ	学生に授業に興味を持ってもらうには—教歴1年目の反省と課題— 山田春菜	錯視の応用と社会への貢献 北岡明佳	熱中症の病型および発症機序—救命のための身体冷却法— 松本孝朗	甲野純正
146 編集後記								



自由を生き抜く実践知



法政大学
HOSEI University





法政大学
HOSEI University



法政大学
HOSEI University

University Current Review

大学時報

2025.07／NO.423



多様性、公平性、包摂性
のある大学を目指して

ダイアナ・コー 法政大学総長

法政大学憲章は、「地球社会の課題解決」を使命とし、多様な視点と先見性を備えた研究と、自由な思考・行動を貫く自立した市民の育成を社会に約束している。その実現には、教育や研究の充実に加え、DEI（多様性・公平性・包摂性）に富んだ環境が不可欠である。2024年に設立されたDEIセンターは、啓発、居場所づくり、相談、学生との協働を通じて、大学の構成員が社会的な格差を感じることなく安心して創造的に学び、働ける環境づくりを進めている。

地域とともに歩む地方小規模大学

— 敬和学園大学の「実践するリベラルアーツ」教育 —

金山 愛子

敬和学園大学学長

はじめに

敬和学園大学は新潟県、新発田市^{しはたし}、聖籠町^{せいろうまち}、キリスト教諸教会より多大な支援を受けて1991年に開学した、キリスト教に基づくリベラルアーツ教育による全人教育を行う大学（人文学部設置）である。「神を愛し、隣人を愛する」というキリスト教精神によって建てられた本学では、学生一人ひとりを神に愛された存在として尊重し、「人権・共生・平和」に価値を置くキリスト教教育・地域貢献教育・国際理解教育を行い、「真理を探究するとともに心の教育を実践し、国際的教養豊かな良心の人材の養成」を教育目的としている。ここ10数年は「実践するリベラルアーツ」を掲げ、教室内の学問にとどまらず、地域や海外に出て実践的に学ぶことを教育の中軸に据えて

きた。本稿では、地方小規模大学が地域と連携して行う教育の一端を紹介させていただきたく思う。

1. 敬和学園大学の「実践するリベラルアーツ」

本学は、開学時より「ボランティアする大学」として、被災地支援や地域の教育活動等におけるボランティア活動を実施してきた。その実績をもとに、学びの要素に重点を置いてサービスマーケティングへと深化させ、演習等での学習を地域での実践活動に結びつけている。この「まちなかキャンパス化」構想においては、行政、社会福祉団体、企業、NPO法人等、学外の方々と関わりながらチームで協働し、学生は知識の修得と実践活動による循環の中で、確かな学びの成果を挙げている。このような活動は修得した知識の

応用・再評価につながるだけでなく、学生の汎用的能力を高める上で重要である。学生たちは、社会とつながり地域課題に取り組むことで、自分たちの活動が目に見える成果を生んでいると実感でき、大きなやりがいを得ている。同時に、自己肯定感も高まっているようだ。ゼミリーダーとして活動している学生が、さらっと「僕、不登校だったんです」などと話してくれるのを聞くと、時間もエネルギーも要する学びではあるが、このような活動が彼らのエンパワメントになっていると実感する。さらに、学生たちが彼ら独自の発想で固定観念を破り、創造的な活動を行っている点は、リベラルアーツの特色を体現していると言える。

子どもや高齢者、障害者など、社会的に弱い立場の人々に関心を向け、共に生きようとする姿勢は、キリスト教精神に基づくものである。そのような観点から、サービスマーケティング活動には、学長裁量費による資金援助を行っている。また、新発田市から貴重な補助金支援を受けているため、地域に還元できる活動を推奨している。その結果、卒業時アンケートでは95%近い学生が「地域社会の中で、他の人に仕える意欲と寄り添う力が身についた」と答えている。国際文化学科、英語文化コミュニケーション学科、共

生社会学科の特色あるサービスマーケティング活動のうち、ここに3例を紹介する。

(1) 映像作品制作、ラジオ番組制作

(国際文化学科情報メディア・コース)

映像作品制作とラジオ番組制作はリベラルアーツの力を社会に発信する挑戦であると考える。夏冬の集中講義やゼミ活動で地域取材し、歴史、文化、現代課題を深く掘り下げたドキュメンタリー映像の制作を行っている。作品には、佐渡金山と朝鮮人強制労働者の問題や沖縄県営平和祈念公園内に建てられた新潟県民の慰霊塔をめぐる調査など社会問題を扱った作品が多い。コンクール受賞作も生まれており県内外で高く評価されている。ラジオ番組は、地元ラジオ局と連携。「エフエムしばた」とポッドキャストで毎週放送し、ゲストを招いて学内外の多様な話題を発信している。7月初めには放送300回を数えた。制作活動を通じ、学生は社会への視野を広げ、メディアリテラシーを鍛え、学びを力に変えている。

(2) こどものまち

(英語文化コミュニケーション学科 英語教育コース)

市民性教育をテーマとしているゼミでは、子どもの権利

保障の周知と啓発、特に「社会に参加する権利」の保障に向けた取り組みとして、子どもたちが仮想のまちで遊び働くプログラム「こどものまち」を企画・運営している。2023年度から新潟市のこどものまちを開始し、2024年度は「新発田市こども基本条例」の策定に向けて、こども課と協力し、子どもの声を聞き取るワークショップで、学生がファシリテーターを務めた。2024年度のこどものまち「ミニしばた」では基本条例案の周知とパブリックコメント募集を行う仕事を設け、「自分たちのまちは自分たちで動かせる」という体験を子どもたちに提供した。ワークショップで出された子どもの声は基本条例案に反映され、パブリックコメントは新発田市の回答を添えて公開された。学生は子どもの権利保障について学びながら、市民としての意識と実践力を向上させている。

(3) 地域活性化・農福連携プロジェクト

(共生社会学科 ソーシャルビジネス・コース)

サービスマーケティング活動の座学や実践において、キリスト教×リベラルアーツ×ソーシャルビジネスのクロスオーバーを軸においた「あわしまうらむら栗島浦村活性化プロジェクト」や「かみさんこう新発田市上三光農福連携プロジェクト」を実施。学生たちは、過疎化が進む

栗島の島民と島内で国内留学をしている子どもたち、また新発田市内の特別支援学校生徒や社会福祉団体利用者と協働する。そしてPBL学習をもとに明らかになった地域課題に対してビジネスの手法で解決策を探し、その活動の成果や利益を当該地域や福祉の就労支援などにつなげている。例えば、栗島に自生する山菜を原料とする「あまどころミルクアイス」や、上三光の耕作放棄地での農福連携活動による「一人娘みそ」の商品化などがある。ソーシャルビジネスの根底にもっとも大事なものとして据えているのは、広い視野から自由な発想で考えるリベラルアーツと隣人と共に生きるキリスト教の学びである。

2. リベラルアーツ教育の原点に立ち返る

敬和学園大学では、リベラルアーツ教育の充実を目指して2026年4月人文学部に「国際教養学科」を新設。1学科6コース制（歴史探究、多文化・思想、キャリア英語、地域経営、国際社会、情報メディア）へと移行する（届出申請中）。

本学開学の年、1991年の大学設置基準のたいこうか大綱化により、各大学で教養教育の見直しが行われた。その頃、定年の

近いある教員が、「私が大学教員になりたてのところ、教養部がどんどんできたが、定年になる今、今度は教養部がなくなっていく」と話していたのが印象に残っている。それでも本学は専門学校進学率が常に全国1、2位を争う実学志向の強い新潟県という土地にありながら、リベラルアーツ教育を理解してもらうことに腐心し、その教育を貫いてきた。卒業生が、社会に出て大学時代を振り返った時に、リベラルアーツの本質をしっかりと捉えてくれていることも我々の励みになってきた。リベラルアーツの成果は4年間で測られるものではなく、その人の生涯の基盤を形成していることが振り返ってみてわかるような性質のものであると筆者は考えている。

グローバル化、少子高齢化、人工知能等の技術革新が予想を上回るスピードで進展し、先行きが不透明な今こそ、リベラルアーツ教育の原点に立ち返り、当たり前を疑い、自分自身の問いを持ち、分野の異なる学問により得た知識を融合させて多角的に考える教育を行うことが重要である。とかく効率が求められがちなこの社会にあつて、自分らしい生き方を探すには、他者のことを思いやるには、何か創造的なことをするには、心の余裕と考える時間が必要である。したがって、新学科ではレイトスペ

シャライゼーションを導入する。学生が自らの関心や将来設計に合わせて主専攻を決め、副専攻の選択や興味のある科目の履修により、分野を越えた横断的で多様な学びができる設計とした。21世紀に必須のデータサイエンスやAI技術については、専攻や学年を越えて初歩から学べるようにした。知識や自分で考える力、判断力を用いて、これらの技術を活用できるようにすれば、サービスラーニングを通じて実装の機会を得るであろう。

おわりに

予測不可能な時代には、既存の社会の流れや枠組みにとらわれずに、新しい発想で新しい社会を創る人が求められる。大学時代こそ、多くの考え方や価値観、イノベーションに出合い、失敗も許されながら経験を重ねて自分を磨く時間である。人として成長し続けるための基盤となる4年間、競争のためでなく、多様性を許容する幸せで平和な社会を創るために学んでほしいと願っている。そして地方大学の使命として、人口減少に直面する地域に、地域を愛し、貢献しようという意欲と実力を備えた良心的な人材を送り出すことを目指している。